

## 《研究ノート》

### 最近のキーツ研究

菊池 亘

キーツがシェイクスピアと同型の詩人であるということとは、キーツ研究の場合すでに常識的な事實となっている。キーツが詩人という本質的な点においてシェイクスピアと類似しているように、この二人の詩人に對する研究の動きも似ているところがある。だいたい大きく言ってコオルリッヂに始まった哲學的な、あるいは思索的な、そして想像力に充ちたシェイクスピアの研究方法は、かなり長い間行われていたものと見なければならぬ。即ち一八一一年から翌一八二二年にかけて行われ、一八一八年に再度行われた彼の講演 (*Lectures and Notes on Shakspeare and Other English Poets, collected by T. Ashe, 1883* 4-1-13 *Coleridge's Shakspearean Criticism, ed. by T. M. Raysor, 1930* など) 以後年々ためられ出版されてくる) は新しいシェイクスピア研究の方向を拓くものとして當時極めて重要な意義をもっていた。もう少し詳しく言うとならば、シェイクスピアの全作品のなかに貫かれていた内心の發展、すなわち精神史を精到に跡づけようとするにであった。もちろんこ

れはコオルリッヂと言うすぐれた詩人にして、かつ當時まれに見る形而上學的知識にめぐまれた人間にして、始めて可能なことであった。われわれはコオルリッヂをロマン派の詩人と言う。たしかに言葉の眞の意味において彼はロマンチックであった。この大きな彼の特質がそのままシェイクスピア研究にも反映して、ちょうどもう一人のすぐれた異國のシェイクスピア研究者と相似的な對極をなしている。コオルリッヂがシェイクスピアを講じた年よりも三年早く(一八〇八年)シュレーゲル(A. W. Schlegel)がウィーン大學において「劇藝術および劇文學について」(*Ueber dramatische Kunst und Literatur*) という講演を行なっている。もちろんこれはシュレーゲルのロマン主義の世界観ないしは藝術論がその基礎をなしている。かくしてイギリスとドイツのすぐれたロマンチストによってシェイクスピア研究の方向は堅固きわまる基礎づけがなされたわけである。このことがはたしてシェイクスピア研究にとって幸か不幸かということとは暫く措くとして、とにかくこの強力な線にそって研究がすすめられて行った。この間實に多くの、そしてまた、すぐれた研究者が出た。このおびただしい研究を集大成するような立場に立つのがダウデン(H. Dowden)とブラッドレイ(A. C. Bradley)である。ところが約百年にわたってつづいたこの研究方法もゆるぎ始める時がきたのである。第一次と第二次の大戦にはさまれた時期に、踵を接するように、と言うと甚だ大げさであるが、今までとは異なった方向、ないしは今まで閑却されてきた方向へ多くの學者たちが眼を向け始め

たのである。(H. Fuchère, *Shakespeare* (Longmans, 1953) pp. 9-10.) しておそらくこの新しい研究家たちのきびしい批判の眼が最も多く向けられているのはブラッドレーのようである(例えば G. B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies*, Routledge, 1951 など)。とにかく今日のシェイクスピア研究は今までは全く異なった新しい方向の開拓がつつげられているようである。この新しい方向の委細はこの小論にとっては関係はないので觸れることは避けるが、この轉廻的な新しい研究の勃興ということが興味のあることなのである。いささか失當をかえりみずに筆者はシェイクスピア研究の轉廻を語ったが、實はこれとよく似た現象がキーツ研究の上にも起っているのである。もちろんこの研究の動きはシェイクスピアとキーツ兩者の間にはなんのかかわりもないことは斷るまでもないが、偶然的とは言え、この事實を心にとめておくことはキーツ研究の動きをみる場合に何らかの参考にはなると思うところがあるのである。

シェイクスピア研究とキーツ研究を同日に論ずることは、もちろんできることではないが、だいたいシェイクスピア研究の動きを、いくぶんか縮少すればキーツ研究にもあてはまらないこともない。(もちろん筆者はこういう比較が、機械的に、あるいは圖式的に簡單に行われるとも考えてもいないし、またそういうことをしてみたところで餘り意味のないことは心得ているが、ただ説明の便宜上利用したにすぎないことは斷るまでもないことであろう。) さてここでキーツ研究の新しい動きを語ろうとすれば、やはり今まで筆者がシェイクスピアに行なったよ

うに、ある程度過去までさかのぼって、そこから話をすすめなければならぬ。シェイクスピアがそうであったようにキーツ研究の礎石を決めたものがある——シル(N)ズ「ジョン・キーツの生涯」書簡「遺文」(R. M. Milnes (Lord Houghton), *Life, Letters, and Literary Remains of John Keats*, Moxon, 1848. Second ed. 1867) がそれである。キーツの死んだ一八二一年からこの書物の刊行された一八四八年にいたる二十七年という歲月の間にはこの薄命の詩人に對する辯護あり(例えば P. B. Shelley) 非難あり(例えば Th. Carlyle) と言った状態で、褒貶さだまらなかつたあたり、初期のシェイクスピア評價に似ている。ホートン卿によって非公式に蒐集されたこのキーツ評傳はたしかに後のキーツ研究に對し記念碑的な意義をもっている。だいたいキーツ研究はここから始まるとみていい。したがって今日までキーツ研究は約百年餘の時間的經過があるわけである。以下これは筆者の便宜に基づく區分であるが、だいたい三つの時期に分けて考えてみると便利のようである。即ち第一の區分をホートン卿の評傳刊行の時からマリイ(J. M. Murry)の研究の出現まで、とし、それから、だいたいまりイの研究がすすめられていた(と言ってもこれは出版を念頭においた表面的なことであって、實際の研究を指しているのではない。事實マリイは今日でもなお強い關心をキーツに抱いているはずである) 約五・六年を第二の區分とし、以下今日までを第三の區分とするのである。(すでに百年餘という時間的經過があるのであるから、そろそろキーツ研究の跡づけが

なされてもいい時期と思われるが、今のところそのような研究は見あたらないようである。したがって筆者の区分付けには有力な根拠を與えるわけにはいかないことをあらかじめ断つておかなければならない。

この小論のタイトルが「最近のキーツ研究」となっている以上これに多くかかわってくるのは第二の区分以降である。ホートン卿を發端として新しく發見された資料に基づいてキーツ研究は次第に精到に、そして正確なものになってきた。この間の研究方向はだいたいシェイクスピアの場合におけるブラッドレイまでの時期における方向と同じように、主力はキーツの内的發展の跡づけに向けられている。これと附隨してキーツの作品そのものの手法なり、キーツに影響を與えた他の詩人たちへの着目もなされている。要するに第一の区分に屬する研究は新しい資料が見出されてもそれはキーツの精神史へ結びつけられ、今までの研究をさらに深く、かつその基礎を固める方向に利用されてきたようである。もちろん、ここまで進められた研究はある極限まで來ていたのかもしれない。ちょうどこのあたりに出てきたのがマリイなのであった。ここから筆者がこの小論において主として扱おうとする第二の区分が始まる。今までの第一の区分に屬する研究が主としてアカデミックであったのに對し、マリイのそれはむしろ評論家的なものであったことが著しく異なる點である。したがってマリイによって書かれたキーツに關する書物は純粹に學問的著作と言うよりは、むしろ彼が自己の文學的信念、ないしは哲學へのよりどころとして彼を

最も強くひきつけた詩人に對する信仰告白とみた方が當を得ているであろう。マリイが評論家として立つて行こうとするとき、彼が精神の支柱として求めたのがキーツの生き方であったのである。キーツのなかに何よりもまずその生き方に強く引かれたということは、言いかえればキーツのなかに自己を支えてくれるべき哲學を求めたということはマリイのキーツ研究の大きな特色であり、今までに見られなかった新しい態度であると言わなければならない。したがってここには純客觀的な立場に立つというよりは、むしろ熱情をこめた、かなり主觀的な立場が取られてくる。もともと評論家としての立場からなされたマリイの研究（というよりも、むしろ評論というべきであろうが）は、いわゆる學究的なものではないにしても、極めて特色のあるものと言わなければならない。彼がキーツとシェイクスピアとの間に密接した詩人的關係を明確にとらえたということは彼の没すべからざる功績と言わなければならない。これはたしかにキーツ研究に新生面を拓いたものである。

しかしながら、この精神的支柱ないしは哲學を求めるといふ態度は、よく考えてみれば、第一の区分に屬する研究態度の延長であり、生みだされた彼の研究成果は、やはり第一の区分の *paradigm* にすぎないとも考えられるのではなからうか。したがってやはりマリイの場合も今までの研究とは異質的なものではありえないのであり、むしろ更に新しい方向にこれをおし進めたといふべきなのであろう。マリイのキーツに關する研究成果とは次の二つである。

*Keats and Shakespeare, a Study of Keats' Poetic Life from 1816 to 1820*, Oxford, 1925.

*Studies in Keats*, Oxford, 1930.

前者が先に述べたキーツとシェクスピアとの間に同質の詩人的素質を力強く、かつ明確にみとめた劃期的研究である。「一八一六年から一八二〇年に至る詩人的生活」と言えば、これはキーツの詩人的生活の全部を指すことになり、眞の意味においてキーツが全幅の振動をもって生活を送っていた時期にあたる。後者の研究は前者において附隨的に考えられることを取りあげたものであり、前者に對する補助的な研究にあたる。ところがここに注意しなければならないことは後者のタイトルが版を改めるごとに次のように變つていゝることである。

*Studies in Keats* (1930, 1st ed.) — *Studies in Keats: New and Old* (1939, 2nd ed.) — *The Mystery of Keats*

(1949, 3rd ed.) — *Keats* (1955, 4th ed.)

これをみても判る通りマリイのキーツへの關心は今日まで失われていないということがはっきりする。そして改版ごとに行くつかず所載の項目が増えているのである。前者の研究すなわち *Keats and Shakespeare* の出版から數えてみるというような表面的な計算によつてもマリイのキーツに對する關心は三〇年はつづいていゝのである。このように相當に長期におよぶ研究的關心はどのような影響を他のキーツ研究家たちに與えたであろうか。筆者の見た範圍で言うならばマリイの線に沿つた研究はどうしたことか出ていないようである。彼の二つの成果に

盛られた内容は他の研究家に對して何らかの刺戟は與えたことであろうが、その刺戟を基にしてさらにマリイの所説を強力にすめ、かつ裏付けを固めるといふような研究が出ていいはずであるが、出ていないといふこの現象はたしかに面白いと言わなければならない。なぜ繼續的な研究が出なかつたのか。これには何らかの理由があるはずである。この理由に無意識のうちに應えているのが筆者の考えるところでは第三の區分に屬する最も新しい研究であると思ふのである。たしかに以上みたところによるとマリイは不幸であつたといわなければならない。しかしマリイのこの不幸は第三の區分に對して消極的とはいへ、それなりの橋渡しの意義はもっているのである。(いかなる研究家といえどもこういう不幸は各自擔うという運命はさけられないではなからうか)

それでは第三の區分に屬する研究家たちの態度はいかなるものであるか。これも極めて概括的な言いかたを許してもらわなければならないが、この新しい研究家たちは、意識的にしろ無意識的にしろマリイの態度に反撥しているようである。反撥の對象になる點は何かといふとマリイの根本的な態度ともいへば、キーツのなかに哲學を求めようとする態度がそれである。なぜマリイの一種求道的な態度は否定されなければならないのであるか。この否定の背後にひそむものを明らかにすることでは、またとりも直さず新しい研究態度を明らかにすることもあるようである。マリイは彼の「キーツとシェクスピア」のなかで言う——「キーツの詩を詩として客觀的に鑑賞すること

は全くこの書物の目的とするところではない。その關心とするところは、その詩の下に横たわる詩人の魂の深奥な、そして自然の動きを闡明することにある(一二九頁)。この言葉に對してリーヴィズ(F. R. Leavis)が極めて警戒的であることは當然なのである(Revaluation, p. 242)。

さらにわれわれもこのマリイの言を警戒することが必要なようである。一體キーツに限らず「詩を詩として客観的に鑑賞すること」は可能なことであろうか。讀者が自己の全身全霊をあげて詩のなかに没入して行つて始めて詩の鑑賞が可能なのであり、もしマリイにして詩の客観的鑑賞の可能性を信じているとすれば評論家としての才能すら疑わしくなってくる。しかしこの個所はこの小論にとって重大なことではない。重大なかかわりをもってくるのは次につづく個所である。その詩の下に横たわる詩人の魂の深奥な、そして自然の動きを闡明すること」がこれまた果して可能なことであろうか。魂の奥底は當の詩人にすら語ることは不可能であろう。「詩の下に横たわる」のではなくして、詩の上に現われた感情を少しでも感じ取れば、それが詩を読むことではなからうか。もともと詩人の哲學はエリオットの言葉を借りて言えば「感性化された思想」(Felt thought)なのであるから、詩人の哲學はやはり讀者の方で感じ取るべきものであつて、「闡明」(elucidate)得るものではないであらう。このように素朴な弱點を有しながらも、とにかくその立場を強行して行つた情熱は意外に一つの新生面を拓く結果とはなつたのであるが、マリイのこの方向に、その後の新

しい研究家たちが沿わなかつたのは當然なことであるし、正しい方向をとりもどしたということにもなるのである。そしてこの第三の区分に屬する新しい研究は、むしろ第一の区分の研究を更に深めるか、そこにおいてとり残された部分を新しく取りあげるか、あるいは、この古い研究の再検討といったような方向に動いているのが感じられる。以下においてこの新しい研究の成果の主なるものを取りあげて具體的にその例を見て行くことにする。

新しい研究のうちでも特に目立つのは「エンディミオン」(Endymion)の再検討、ないしは再解釋と云ふことであるように思われる。この問題を中心に取りあげた研究のうち早いものはJ. R. Caldwell, *John Keats' Fancy*, New York, 1945であらう。この研究はD. Hartleyの觀念連合の學說と結び付けて研究をすすめたものであるが、いささか公式的な割り切り方が氣になるが、この長詩のライト・モーティフを「眠り」としてとらえ、そのアレゴリーを「夢の波動するアレゴリー」と解釋している(同書、一三一頁)がこれは新しい見方である。しかしこれではまだ根本的に新しくはなっていない。根本的に新しい見解を示したのはNewell F. Ford, *The Prefigurative Imagination of John Keats* (A Study of the Beauty-Truth Identification and Its Implications), (Stanford Univ. Pr., 1951)である。もともとこの研究の主題は「エンディミオン」ではなくキーツの「ギリシャ古遊へよせるオード」のなかに現われてくるBeautyとTruthのそれぞれの意味、および

びその連關をとらえようとするのであるが、同書の三九一八六頁に示された「エンディシオン」の再解釋は今まで現われたうちで最も精到にして新しいものである。詳しいことは一切ここでは割愛しなければならないがシェリイに見られるようなプラトニズムを「エンディシオン」の香り、ないしはテーマとすることを否定するのである。なるほど従來のプラトニズムの立場に立つ見解は一應筋道が立っているように感じられるのである。というのはシェリイと同時代の詩人キーツに、シェリイと同じものを求めてもよさそうに思えるのである。そして今までのプラトニックな解釋でわれわれは満足していたのである。しかし考えてみれば、時代は同じであっても根本的に資質を異にするこの二人の詩人に同じことを要求することは始めから誤っていたのである。フォードは「エンディシオン」をプラトニズムとは全く對蹠的な感覺性、とよりよりはむしろ肉感性にその特色を見ようとする。ここにおいて彼はキーツから觀念性を剝奪して、素朴な感覺的な詩人としてキーツをわれわれに納得させようとするのである。たしかに觀念性の稀薄なキーツをこのように解釋することには筆者もかなり同感しているし、さらにこの線に沿って強力に研究をすすめて行くべきであると考えられている。

次に今までの研究において残されたものを拾いあげてこれを究明した研究は G. Murchie, *The Spirit of Place in Keats*, Newman Neame, 1955 及 R. Gittings の二書『John Keats: The Living Years, 21 Sept. 1818—21 Sept. 1819, Heinemann,

1954 年』の *The Mask of Keats (A Study of Problems)*, Heinemann, 1956 である。この三つの研究は同一の方向を指したものである。マッキーの研究は表題に示す通りキーツの足跡を實地に訪ねて調べあげた實證的研究であり、後者二つの研究は今までに取りのこされていた相當に小さい部分にまで渡った研究であり、キーツの用いる言葉ないしは情調の出所を克明につきとめようとするかなり煩瑣な研究が大部分であるが、*The Mask of Keats* に含まれたダンテのキーツへの影響とか、あるいは今まで餘り重要な意義を持っていないと考えられていた「道化帽子」(*The Cap and Bells*)への再認識は確かに新しい着眼と言わなければならない。この三つの研究はキーツの作品にじかに觸れているものではないが、直接作品そのものは再検討なり、新解釋を目指した最も大事な方向に向いたものは次の二書が主なるものである。Earl R. Wasserman, *The Finer Tone*, Johns Hopkins Pr., 1953 及 E. C. Pettet, *On the Poetry of Keats*, Cambridge, 1957 である。前者の立場は、作品の中に哲學や神學などを求めることは pedantry であるとし、またいわゆる作品を作品として鑑賞するという「新批評主義」(New Criticism)の立場も狭いとし、全力をあげて「言葉のレヴェル」のあなたに、さぐりを入れ、いかにして詩情(poetry)が表面の意味を限定し、同時にまた、單に言葉の内容と明確に區別されたものとして詩情がそれ自體において何を述べているかを學ぼうと努めることによつて、キーツの主な詩のなかに含まれてゐると私が信ずる豊かさを説明しよう」(同

書、七頁)とするものである。主な詩とは「ギリシヤ古甕によせるオーン」(Ode on a Grecian Urn)、「つれなきたおやめ」(La Belle Dame sans Merci)、「聖アグネス祭前夜」(The Eve of St. Agnes)、「レイン」(Lamia)、「夜鳴鶯へよせるオーン」(Ode to a Nightingale)の五つを指す。この方向は確かにさらに深めて行くに價いする方向であると筆者は考えている。後者の研究はリーヴィズの系統に立つもののようである。そして「エンディミオン」(これは相當詳しく觸れられている)その他のいくつかの作品のほかに、キーツの作品の音楽性がやや主力的に考究され、かなりキーツの作品の本質に觸れている。またこの研究は最新の研究までを含めて、觸れ得る限りの研究

を利用し、かつこれを批判している意味では今までの研究の集大成と言えないこともない。(このなかにおいて前者のワッサーマンの研究もかなり批判的になっているが、ここでは觸れないことにする。)とにかく精緻なことは比をみないような気がする。だいたい今後キーツ研究の動きは、もちろん豫断はできないし、また慎しまなければならぬが、この二書的な態度あたりが中心になって行くのではなからうか。またそうあるのが最も正しいように考えられるが、キーツ研究は最近になって漸く、しっかりと軌道に乗ってきたようである。

(一橋大學助教)